福井商工会議所青年部会会報

福居

会報
第30号
昭和62年4月20日発行
発行所
福井商工会議所青年部会
発行責任者
天野吉壹

――広げよう街づくりネットワーク
第十回『市民の広場』開催される
「特徴ある街づくりをめざして」

「特徴ある街づくりをめざして」をテーマに第十回市民の広場が三月二十八日（土）午後一時三十分から商工会館五階で市民や会員ら約百人が参加して開かれた。

林逸男副会長のあいさつに続いて、第一部に移った。

以下、討議等の要旨

〔第一部　問題提起〕

(1)福井の現状及び都市間競争

街づくり委員会の永井弘明委員長が「今後は都市間の格差がますます広がる恐れがあるが、福井には再開発のプランこそあるが実現されていない。今、村おこし的エネルギーが必要ではないか、これからは百貨店的街づくりではなく、何か特徴ある専門店的街があってもいいのではないか」と訴えた。

そして、柴田治是委員から福井市の街づくりを進めてゆく上で良き協力者を探し出すことを目的として調査を実施したアンケートの結果を報告した。

〔第二部　グループ討議及びアドバイザーによるコメント〕

（コーディネーター　当青年部会　小川修）

(イ)福井の街（街づくり）の問題点について

(1)事例発表

福井駅前地区の若手経営者で組織する「CORE」の小川喜男副幹事が「街づくりを進めるには、商店街巣位にとらわれた発想ではいけない」と訴え、又「福井の特徴を出すため禅を世界にアピールする企画をしてはどうか。発想の転換、民間活力と行政とのタイアップを主張した。

(2)グループ討議

街づくりへの市民の参加意識を高めようと今回初めて設けたもので、提出された意見は☆町に色あいがなく灰色のイメージ☆車社会への対応が遅れている…駐車場不足。若者の集まる場所、施設（大学など）が少ない☆貯蓄性が高過

ぎて消費行動が低い☆城跡に県庁があるのはおかしい☆繊維、眼鏡に代る産業が無い☆主張ばかりして実践の気運がない、行政に頼り過ぎる等、県民性に問題がある☆などが発表された。

(3)アドバイザーによるコメント

㈱ベル　勝木健俊社長

若者の県外流出が多い。若者にとって魅力ある街づくり（遊びの空間、魅力ある企業）が必要だ。

福井市企画調整課

小辻康雄課長

良い所は伸ばし、悪い所は発想の転換を図り、これからの福井を作るべきである。

福井大学工学部

本多義明助教授

職場ゾーン、住居のゾーンはほぼ確立しているが、消費、レジャーいこいの場的な第三の空間を整備する必要がある。

(ロ)福井の目指す方向性及びその実践方法とは

(1)事例発表

福井青年会議所

髙島範行副理事長

明るい豊かな住みよい街づくりの一環として、道路愛称命名運動の事例報告、福井の花あじさい運動、福井フォーラム等の報告があり、今後、主要交差点に愛称を付けたい、と発表した。

(2)意見発表

当青年部会　大須賀廣美

街づくり委員

福井の街をアートシティと名付け福井の開発に芸術文化を取り入れる。官公庁の建築物、公共施設、民間の建築物にアート感覚を盛り込み二十一世記までに福井の街のコンベンションシティをめざさなければならない。

(3)グループ討議

大きくはコンベンション都市と商業都市の二つの意見に別れた。

☆ソフト面の整備が遅れている☆街づくりリーダーの育成、行政への頼り過ぎ☆雪に強い交通体制づくり☆歴史、自然の利用☆遊びの空間が必要☆一兆円規模事業の構想等。

(4)アドバイザーによるコメント

（コーディネーター　小川修）

当青年部会

㈱ベル　勝木健俊社長

福井の経済成長率を日本の経済成長率より高くしないとついて行けない。文化へ逃げるのではなく、産業を活性化する事によって、経済を活性化させ人を集める。

間口を狭く奥行きの深い重点主義の街づくりが必要である。福井は日本の中心の位置にあたり、物流都市を目指した方が良い。

福井市企画調整課

小辻康雄課長

福井らしいものを皆んなで作る必要がある、もうしばらくで福井の顔が出来てくる。だから十年先、二十年先も大事だが実行性のあるものを今から一つ一つ実践して行く事が大切である。意見を行政にぶつけて欲しい。

福井大学工学部

本多義明助教授

都市空間が福井には無い、都市づくりに二十年位放置していた。第三の空間を都市に求めなければならない。多機能をもつ都市づくりが必要。

〔総　括〕

当青年部会　永井弘明

街づくり委員長

街づくりの意見は十人十色。グループ討議で十分な意見が交換出来た。この場が市民から街づくりの気運を高めてゆくきっかけとなり、市民による街づくりの実践につなげてゆくことを訴えた。

『福井の街づくり』を大きなテーマに揚げ開催して来た『市民の広場』第十回の区切りにふさわしい今回の市民の広場であった。

街づくり、活性化、○○起しを叫ければれて数年、市内、県内であらゆるフォーラム、会議等が開催され、ようやく動き始めた今、我々青年部会は、それらを実践の方向に向けて一歩進み出したのである。

初めての試みである市民を混じえてのグループ討議は、各テーブルとも時を惜しむかの様に熱弁が続いた。何を言ってもやはり今住んでいる福井の街を皆んなが愛しているからだろう。

今回の市民の広場を土台に、今後は福井の街づくりに対し、より具体的に、そして小さな事から実践して行く事が我々青年部会としての大きな課題であり、期待される事と思わなければならない。

三月度例会

三月度例会が卒業生を送る会を兼ねて、三月二十日パレスホテルで開かれた。天野会長のあいさつの後、今回卒業する、山本勝郎君と神田芳明君が思い出話や感想を含めてあいさつがあり、天野会長から記念品が贈られた。尚両君はOBとして残り活躍します。

三月度役員会

三月度役員会が三月十三日福井商工会館で開かれ、昭和六十二年度の県商青連代議員が次の通り承認された。

幹　事　天野吉壹

役　員　小川　修

〃　〃　発坂卓雄

代議員　林　逸男　奥村豊一

〃　石橋正人　南後博一

〃　松村　顕　五十嵐正光

〃　竹越治美　木村茂生

〃　小林庄一　以上十二名

商工会議所青年部会全国大会が十一月六日、七日、八日、沖縄で開かれるが、参加者全員を対称に旅費積立をする事になった。五月、七月、九月の三回積立で、一回二万円。計六万円積立る事になった。

〔第四回翔生ゴルフ大会〕

第四回翔生ゴルフ大会が絶好のコンデションの中福井国際カントリークラブで八人が参加し開かれた。今年で二年目とあってメキメキ上達、素晴しいショットの連続でした。成績は次の通り。

優　勝　木林　康仁

二　位　中村　典幸

三　位　上野　秀治

イントラ時代への対応

一九八六年は激変の年でした。円ルートの急騰、世界最大の債権国日本の誕生など急変を重ねた年で、企業として積極的な対応を保てぬまま、ひたすら合理化努力しただけに徹した忍の経営に終始した一年でした。しかし、こうした現象を長期的トレンドにてらしてみると、これら、七十一年、七十三年のドル、石油ショック以来作られてきた経済システムから生じたもので、八十六年はそうした新システムの〝トガ〟が一挙に噴出し日本経済をゆるがし企業への新しい対応を要求した年であるといえよう。

こうした今回の円高不況は景気変動の一局ではなく、企業構造の変革期であり、これまで企業が営んできた企業経営戦略の基本原理をドラマチックに転換し、新時代、新しい対応策を早急に整えなければならない。この時こそ具体的には「事業、組織の総点」に直面している時期であり、その対応に日本企業の本当の実力が試されているときといっていいだろう。

ここではそういう新しいシステムへの対応策として「イントラ（intra＝内部へ。内需を意味する）」を提案します。それは一つは再発掘を意味し、一つは日本的マーケッテングの再点検、つまり心の問題を意味します。企業の個性とはどういうかというと我社ではどういうモノが作れるとか、販売しているか、消費者側も自分らしさ、個性の時代に突入している今日では個性的イメージをいかに作り上げるかという事が企業戦略のポイントになっています。

「企業の事業、総点検」という事を言いましたが、この総点検の軸になる「個性らしさ、自社のマーケット、販売力、商品開発力」を見直して、チェックを行ない、事業ドメイン（領域）を確立し新しい時代への対応を基本ベースに真剣に取り組みたいものです。

サラリーマン健康投資月九、七〇〇円

「体が資本」のサラリーマンは、毎月平均して九千七百円を健康維持のためスポーツなどに使っていることが、富国生命保険がまとめた「健康気くばり度調査」でわかった。

この調査の対象になったのは、東京、大阪に住む二十歳以上のサラリーマン六百人。

それによると、自分の健康に「自身がある」「非常に自信がある」と答えた人は全体の五五％と過半数。年代別では五十代の実年サラリーマンが最も健康に自信を持ち「自信がある」人は六一％に達している。この率は年代が若くなるにつれて下がり、最低の二十代では五二・三％だった。

健康のために何らかの注意を払っている人は九四％もいる。そのため使う費用は四十代が最も多く一万二千二百円。次いで五十代が九千八百円となっている。二十代は九千四百円で、三十代は最低の八千百円。方法としてはゴルフ、テニス、野球などスポーツのほかに、健康診断を受けることや、健康食品を使用するなどが挙げられている。

新登場!!
事業ローン『福銀ビジネスライン』
便利さ、有利さで事業の発展をバックアップします

消費停滞を打破する方法

民間の調査機関である日本リサーチ総合研究所は二月十六日、消費が停滞している原因と停滞を打破する道を深った調査報告（消費経済白書）を発表した。

所得の増加が望めないなかで消費を増やす方法として、①貯蓄に回る度合いがきわめて強い賞与の在り方を再検討、②多様なライフスタイルや生活のイメージを解明することで、消費者の求める商品を探り出す必要性などを提案した。

また、所得増が無理なら週休二日制など休日増によって消費を刺激しようとの考えに対しても必ずしも支出が増えていない点を挙げ「消費増につながる保証はない」と判断している。

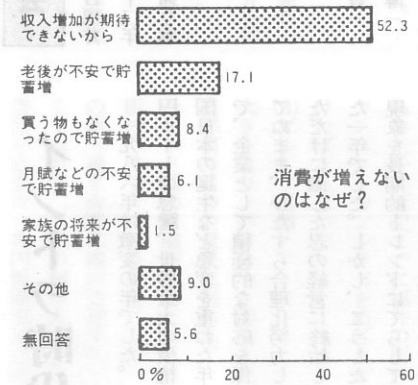
報告書はまた、この数年の消費低迷は「将来や老後が不安だ」などを理由に消費を切り詰め、貯蓄に回しているとしている。

「しかし所得の増加は現状から難しいので、消費性向を高める工夫が必要としている。

それには、変動所得である「賞与」が貯蓄比率が定期給与に比べて高いので、収入全体が同じなら賞与より定期給与に傾斜した方が消費増につながるとみている。

また、最近の生活の仕方や、消費選択の基準が「理性」から「感性」「知性」の方向に移行し、さらに新人類の登場により「感覚」も重要な要素になってきていると分析している。

（サンケイ 2/17）



出版

『地域活性化イベント入門』

糸川 精一著

「イベント企画入門」（'83年刊）の著者による地域活性化イベントの手引書。

単発的、お祭り的、なんでも博的行政イベントの時代を経て、いま地域活性化のキーワードになりつつあるイベントのコミュニケーション・パワーを、豊富な事例をよとに紹介している。

独自のイベント論を展開する第一章「地域活性化入門」に続き、第二～四章ではケースを中心に『過疎地の村おこし』「街中のホットなコミュニケーション」「都会の先取り競争」の各編を。

また終章の第五章「企業事例&資料編」にはイベント企画のチェックリストも収録。（一、三〇〇円）日本機関紙出版センター刊

『岩波・現代ふるさと情報』四十七都道府県の現状と将来―岩波書店編集部編

―21世紀をのぞむ新しい日本総覧。A5版・一、〇〇〇円……岩波書店。

ちょっと一福

〝頭の体操〟〝紳士のスポーツ〟などと言われているビリヤードの人気が急上昇。福井にもビリヤードの店が増えたが場所が空かず、時間待ちしなければならない状況の様です。

ビリヤードは一四世紀ごろにイギリスで発祥し、世界に広まり、アメリカでは南北戦争直前ごろにポケットビリヤードが大流行したそうです。日本にビリヤードが伝わって来たのは江戸時代（一八〇〇年代）にオランダ人から伝わり、その一〇〇年後に、アメリカからポケットビリヤード・テーブルが運ばれポケットビリヤードがローテーションゲームとして京都を中心に普及したと言う事です。

今、爆発的人気 ビリヤード

あなたもビリヤードの店を開いてみませんか

只今、チェーン店募集中!!

ふくい フォーカス77

…… お問い合わせは ……

本 部 0776―26―3528

直営店 0776―23―2647（11:00～24:00）